

川崎医療福祉大学生の現在

吉田 浩子*¹

はじめに

大学教育のあり方があちこちで論じられるようになった。私たち教員はその担い手である。しかし、その教育の対象である学生たちが、どのような日常を送り、どのような人間関係の中で何に悩み、何を感じて生きているか、私たちはどのくらい知っているのだろうか。これら若者を対象とした研究は数多くなされている^{1,2)}。だが、筆者が知りたいのは一般論ではなく自分が日々接している学生たちの実際なのである。講義で出会う学生は、楽しげに群れ、時には無礼で傍若無人にも見えるが、一方で、硬直した人間関係の中で緊張し疲れ果て相談に訪れる者がいる。何よりも講義をする身として、受講者である彼らの実際を知ることは、よりよい講義につながるに違いない。

もっとも学生たちは、「先生が学生のことをわからないのは当然だし、あきらめている」と口をそろえる。彼らにとって、教員はまったく別の次元に生息しているテレビ画面の中のめずらしい生き物にすぎないことすらあるらしい。

にもかかわらず、「自分の一番興味のあることを探し出し、それについて自分の考えを説得力を持って示すに足るデータを集め、結果をまとめる」というゼミの課題に対して、多くの学生は自分たちの学生生活や人間関係をテーマに選択し、取り組んだ。各自が書き上げようとしている論文の出来はさておき、そこには「自分たちのことをわかってほしい」という彼らの願いがあふれていた。そこで、彼らの1年半に渡る試行錯誤に報いるためにも、得られた結果を総合し、まとめてみることにした。ここには、確かにこの大学に生きる学生たちの姿を垣間見ることができる。そこから私たちが何を学び今後にかかしていくか、それは学生たちから筆者に与えられた課題であると認識している。

方 法

1999年11月から翌年1月にかけて、川崎医療福祉

大学（以下 K 大学と記す）の任意の学部学生に対して、学生の日常を問う質問紙調査を実施した。実施場所は大学構内とした。質問紙の詳しい内容は紙面の都合で省略するが、予備調査を経て質問内容を検討、決定した。回答者数は質問紙の種類によって異なるが、結果的にのべ700人から解析の対象となる回答を得た。

結 果

ここでは、得られた結果の中から特に学生のモノや他者との関わりよく表していると思われる以下の項目について報告する。

1. 流行に敏感？

K 大学部生の日常を垣間みるひとつの指標として、現代の若者に「流行」しているものの普及率を調べた（表1）。ほぼ9割の学生が携帯電話を所有し、運転免許も取得、4割の学生は自分名義の車も所有していることがわかった。物質的にはかなりめぐまれた環境あると言えるかもしれない。

表1 川崎医療福祉大学生の日常 その1「流行」

対象	普及率 (%)	
携帯電話*	92	
車両運転免許**	89	
自動車**	44	
ファッション関連***	女子	男子
パーマ・髪染め	65	40
古着	46	60
デニム素材の服	57	42
カラータイツ	56	0
キャミソール	51	0

* n=100, **n=110, ***n=129

世の中の流行を最も良く反映しているファッションについても調べたところ、女子学生の6.5割、男子学生の4割がパーマをかけ、髪を染めており、約半数はこの年「流行している」と認識されていた「最新流行のもの」のうちのいくつかを購入し身につけていた。彼らの生活も世の中の流行に同調していることがわかるが、なぜ流行に同調するかといえば、その理由は単純ではない。例えば、回答者の中から、

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科
（連絡先）吉田浩子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

その時点でパーマをかけたり、髪を染めている学生を抽出し、その理由を問うと、4割以上の学生が「自分自身を変えたいから」と答えていた(表2)。頭髪の色や形を変えることと「自分を変える」ことが果たして直線的につながるのかなのかどうか疑問だが、少なくとも彼らには何らかの変身願望があることが伺えた。

表2 パーマ・髪染めをする理由

1. 自分自身を変えたいから	(43%)
2. 興味本位	(33%)
3. その他	(24%)

(n=70)

また、これら流行中の物の利用方法について尋ねたが、ここでは「携帯電話」の利用実態について示す。9割以上の学生が常に携帯電話を持ち歩いていることがわかったので、携帯電話に電話がかかった時にどのような行動を取るかを各場面別に聞いた。さらに、現在では、携帯電話を受信した時に、受信した相手と直接会話を交わす「通話モード」であるのか、もしくは電子メールが送られてきたことを示す「メールモード」であるのかを知ることができる。このどちらを受信したかによっても、その場での対応が変わると考えられたので、受信状況をその二つに分けて質問した。図1に、「通話」を受信した場合、図2に「メール」を受信した場合の対応を示す。いずれも縦軸に「自分の置かれた状況」を示し、横軸に各対応方法を選択した人数の回答者全体に対する割合を記した。

「通話」の場合(図1)から説明する。「通話」を受信した場合の対応方法は、「無視する」、「保留にする」、「場所移動してから話す」の4つに分けられた。「あらかじめ電源を切っておく」という選択肢を選択した学生は皆無に等しかったのでカテゴリーとして表記していない。

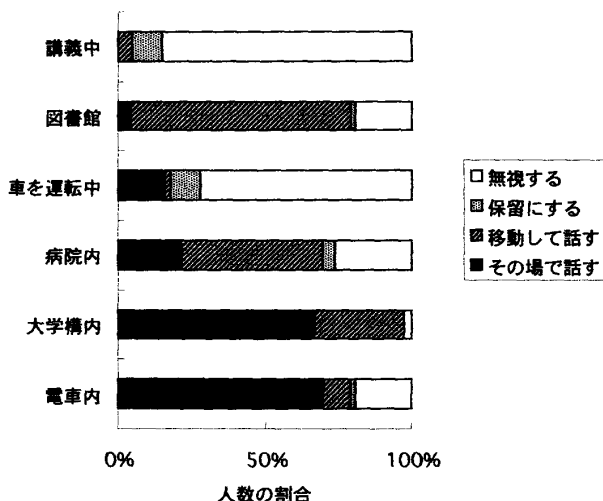


図1 携帯電話受信時の対応(通話)

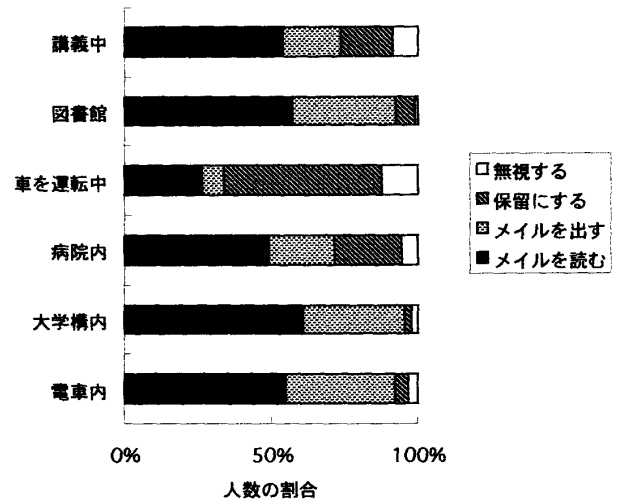


図2 携帯電話受信時の対応(メール)

「講義中」と「車を運転中」に携帯電話がかかった時は、「無視する」割合が高いが、「講義室から外に出て話す」学生も1割ほどいた。約2割の学生は運転中でもかかってきた電話には出て話しをしていた。「図書館」では「場所を移動して話す」学生が圧倒的に多かったが、4%とわずかではあるが、「その場で話す」と回答した学生もいた。「病院」では携帯電話の電源を切るように指示されているはずだが、「場所を移動して話す」や「その場で話す」学生が合計7割もいることがわかる。大学構内では9割以上の学生がその場あるいは場所を移動して電話をかけてきた相手と話すことにしており、電車内でも7割の学生は「その場で会話する」と回答していた。

声を発する「通話」ですら、これだけ様々な場面で「相手と話すこと」を優先しているのだから、「メール」を受信した場合はなおさらである(図2)。「車の運転中」はさすがにメールの読み書きは難しいようだが、それ以外は講義中であろうが、病院、図書館、大学構内、電車内、のいたるところで彼らはメールのやりとりをしていることがわかった。

彼らにとって携帯電話はもはや「流行」というよりも「必需品」であるのかもしれないが、その使用方法はかなり利己的であることが示唆された。個人的に電話をかけてくる「自分の知り合い」に対しては寛容で、距離的にすぐ近くにいる他人には無頓着なのである。

2. 何して遊ぶ?

若者の必需品の携帯電話を駆使し、髪の色を変えて流行のファッションも取り入れたK大生たちは、では、誰と何をして遊んでいるのだろうか。

表3に、彼らが誰と、週にどのくらい、何をして遊んでいるのかをまとめた。カラオケ、ドライブ、テレビゲームが人気のある「遊び」であった。遊び相手は、同じ学科の友人の場合が最も多く、週平均

3回は一緒に遊んでいることがわかった。アルバイト先や部活動の友人と遊ぶこともあるが、週に1回は家族とも遊んでいる。

表3 川崎医療福祉大学生の日常 その2 「遊び」

A. 内容	
1. カラオケ (95%)	
2. ドライブ (76%)	
3. テレビゲーム (75%)	
4. 映画を見る(63%)	
5. 旅行に行く(60%)	
B. 遊び相手	
1. 同じ学科の友人 (週平均3回)	
2. アルバイト先の友人 (1.3回)	
3. 家族 (1.2回)	
4. 同じ部活動の友人 (1回)	
C. 誘われた時に断れない相手	
1. 同じ部活動の先輩 (54%)	
2. 同じ学科の先輩 (24%)	
3. 父親 (11%)	

(n=100)

しかし、「遊び」が義務になることもあるようだ。時にはイヤな相手とも遊ばなければならないらしい。特に同じ部活動に所属する先輩に誘われると、「イヤだけれど断れないので遊びに行く」学生が5割以上いた。「イヤなのに誘われると断れずに一緒に遊びに行く理由」としては、「義理」、「相手がかわいそう」といった項目が上がった。携帯電話の場合と同様、自分の身近な相手に対してはかなり気を使っていると言える。

3. 人間関係

以上の結果から、彼らは、すでに何らかの個人的な人間関係を形成している他者、例えば友人や先輩に対しては、とても寛大であることがわかった。電話がかかってくれば何はさておき返事をし、内心はイヤイヤながらも遊びに誘われれば断らない。知人に対してはそんな気配りをしている彼らの人間関係について、さらに詳しく調べてみた。

A. 理解者と相談相手

「自分をもっとも理解してくれていると思う他者」、「自分をもっとも親しみを感じている他者」、「今後さらに親しくしたいと願っている他者」、のそれぞれを「母親」、「父親」、「兄弟姉妹」、「友人」、「恋人」、「その他」のカテゴリーの中から選んでもらったところ、表4のような結果を得た。男女とも「母親」が自分の最大の理解者であると認識している学生が多く、44%の女子学生は、「もっとも親しみを感じ

る他者」としても母親を選択していた。いずれも「父親」は選択されておらず、母親との親しい関係が伺える。その一方、今後さらに親しくなりたいと望む他者は「友人」や「恋人」であり、人間関係の広がりが見えた。

表4 川崎医療福祉大学生の日常 その3 人間関係

A. 最も自分を理解してくれる他者	
男子学生：母親 (38%)、恋人(23%)	
女子学生：母親 (50%)、友人 (19%)	
B. 最も親しみを感じる他者	
男子学生：友人 (40%)、母親(20%)	
女子学生：母親 (44%)、友人 (20%)	
C. 今後最も親しくしたい他者	
男子学生：友人(48%)、恋人(23%)	
女子学生：友人(63%)、恋人(13%)	

(n=201)

cf. 母親に何でも話せる 60%
親友はいない 5%

では、悩みがある時は誰に相談しているのだろうか。回答者の9割が「何らかの悩みを抱えている」と回答していることから、その悩み事の内容と相談相手を聞いた(表5)。将来の進路については、男子は「父親」、女子は「母親」を相談相手に選択しており、その他はもっぱら友人を相談相手としていた。将来

表5 川崎医療福祉大学生の日常 その4 悩み事と相談相手

A. 悩み事の有無	
悩みがある	90%
B. 悩み事と相談相手	
a. 将来の進路	
男子：自分 (20%)、父親(20%)	
女子：友人(33%)、母親 (30%)	
b. 学業	
男子：自分 (56%)、友人(18%)	
女子：自分 (53%)、友人(28%)	
c. 友人関係	
男子：友人 (43%)、自分(23%)	
女子：友人 (61%)、自分(18%)	
d. 異性関係	
男子：友人 (67%)、自分(16%)	
女子：友人 (76%)、自分(8%)	
e. 自己の性格	
男子：友人 (32%)、自分(23%)	
女子：自分(37%)、友人(29%)	

(n=201)

を考える時に「父親」がそれなりに頼りにされていること、彼らにとって「友人」が重要な存在であることがわかる。しかし、「学業」、「友人関係」、「異性関係」、「自己の性格」に関する悩みは、「自分と相談する」すなわち誰にも相談せず自分で解決しようとする者もあり、「将来の進路」についても、特に男子は自分で考えようとする姿勢が伺われた。

B. 大学における友人関係

それでは、大学において彼らはどのような友人関係を築いているのだろうか。調べていくうちに、9割以上の学生が自然発生的な「仲良しグループ」に所属し、そのグループの成員と一旦みなされると他のグループに「移籍」することはあまりないということがわかった(表6)。そして、そのグループの仲間とは「いつも一緒にいる」ことが多いが、グループの仲間「何でも相談できる」とは限らず、「互いに傷つけないように気を使い」、「真剣な議論をする」ことはあまり好まれず、同じグループの仲間とも「あまり深く関わらないようにしている」者もいることがわかった。グループの中で「孤立しないように」、「自己主張はしない」と明言した者もいた。どうやら、「仲良しグループ」に所属していることは重要だが、そのグループの仲間と気楽な関係を築いているわけでもないらしい。

表6 大学の友人とのつき合い方

A. 「仲良しグループ」の存在	
グループに所属している	91%
複数のグループに所属している	45%
グループを変わったことはない	83%
グループ内に親友がいる	44%
B. グループの友人とのつきあい方	
いつも一緒にいる	93%
何でも相談する	59%
互いに傷つけない	56%
真剣な議論ができる	36%
あまり深く関わらない	33%
互いに気を使う	20%
孤立しないようにする	15%
自己主張はしない	10%

(n=134)

C. 大学の人間関係において感じていること

そんな大学における人間関係の中で、彼らが感じていることを表7にまとめた。「他人を傷つけるのも自分が傷つくのもイヤ」な学生が8割以上を占め

た。「集団に溶け込むことが苦手」、「沈黙が怖い」、「多くの友人よりひとりの親友が大切」と感じている学生が約4割いた。3割以下と人数は多くはないものの、「他人との距離のとり方がわからない」、「本心は誰にも知られたくない」、「自分は周囲に受け入れられていないと感じる」、「他人とは関わりたくない」と感じている学生もいた。

表7 大学の人間関係において感じていること

他人を傷つけるのも自分が傷つくのもイヤ	81%
集団にとけ込むのが苦手	48%
沈黙が怖い	42%
他人の目が気になる	38%
多くの友人よりひとりの親友が大事	38%
他人との距離の取り方がわからない	28%
本心は誰にも知られたくない	19%
自分は受け入れられていないと感じる	12%
他人と関わりたくない	8%

(n=134)

考 察

ここに示したデータは、得られた結果全体のごく一部であると同時に、大学の学生全体の傾向を論じるには著しくデータが不足していることは承知している。学部や学科による違いもあろう。しかし、わずかのべ700人のアンケート結果からすら、見えてくるものがある。

ここには、物質的には豊かで、まったく未知の他人に対してはモノであるかのごとく接するが、携帯電話を駆使し(図1.2)自分と交流のある人間に対しては過度にまで気を使い(表6.7)、外敵に出会ったハリネズミのように緊張しつつ生きている、そんな学生像が垣間見える。「なぜそんなに友達に気を使うのかな」と聞いたら、「こわいから」と答えた学生がいた。彼女は何より「ひとりであること」を恐れる。「ありのままの自分が受け入れられるはずはない」と盲目的に信じている。そしてそんな彼女は決して例外ではなく、同じような心のあり様で生きている多くの「友人たち」がいる。

さて、筆者は講義の中で、このような底無しの寂しさを抱えた学生たちに何を語りかけるべきなのか。考えつづけてみたいと思う。

この文章は、以下の諸君の平成12年度卒業論文のデータの一部をまとめたものである。彼らの努力に敬意を表するとともに、多くの気づきを与えてくれたことに感謝します。和泉朝英、雲田慶一、秋山理恵、生田慎吾、岡本奈津子、河野貴男、一宮泰子、石川悦子(順不同、敬称略)。

文 献

- 1) 深谷昌志 他 (1999) モノグラフ・高校生'99 vol.56 高校生の他者感覚, ベネッセ教育研究所, 東京.
- 2) 教育アンケート調査年鑑 (1995他 毎年度刊行) 創育社.

(平成12年12月12日受理)

The Reality for Students at the Kawasaki University of Medical Welfare

Hiroko YOSHIDA

(Accepted Dec. 12, 2000)

Key words : UNIVERSITY STUDENTS, RELATIONSHIPS, EDUCATION, QUESTIONNAIRES

Correspondence to : Hiroko YOSHIDA

Department of Medical Welfare, Faculty of Medical Social Work
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.10, No.2, 2000 429-433)